

姿を見せた下西代古墳群

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



下西代1号墳の全景（北西から）

古墳というと高く土が盛られ、こんもりと木々に覆われた姿をイメージするのが普通である。実際、嵯峨野などの古墳の多い地域を散策すると、いまでも草木の生い茂った小さな丘が点在しているようすを見ることかできる。しかし、ながい年月のあいだに盛土が失われ、地上に痕跡をとどめないものも多い。そのような古墳が発掘調査で発見されることがしばしばある。

西京区大原野一帯は、ゆるやかな丘陵地帯にのどかな田園風景がひろがる地域である。1989年3月

に行なわれた発掘調査で、水田の下から1基の古墳が発見された。

古墳が見つかったのは西京区大原野南春日町、藤原氏の氏神を祭神とする大原野神社から東南の方向へ約800mの地点である。明治6年に作られた大原野村地籍図をみると、^{しもにしだい}と記されているが、地元の人々は、ここを^{しもしやけ}と呼んでいる。社家とは、神社を支える神職集団やその住居地区の総括的な呼称である。つまり、下西代は大原野神社の社家の推定地でもある。

(財)京都市埋蔵文化財研究所は、1986年から数回にわたって、当地で発掘調査を行ってきた。今までに数多く発見してきた平安時代末から室町時代の建物や井戸の跡は、社家に関連する遺構と考えられ、当地の歴史を知るうえで貴重な資料となっている。

1989年3月の調査では、これら社家にかかわる遺構のひろがりを確認するために、当初の調査区をさらに拡張した。その結果、まったく予想していなかった横穴式石室の石列を発見したのである。



下西代1号墳の横穴式石室

石室は上半分が失われていたものの、下の部分は非常によく残っていた。また、周辺の地形の様子から、墳丘裾部も残っている可能性が高いと判断し、後日さらに調査区を拡張して再調査することにした。再調査は1989年6月から7月にかけて行なった。

調査の結果、入口の部分は削り取られていたものの、南にむかって開口する横穴式石室の全容が姿をみせた。

石室の形態は、両袖式で玄室は側壁が胴張り状にふくらむ。石室の大きさは全長7.5m以上、玄室長3.0m、幅1.4～1.8m、羨道長4.5m以上、幅1.0～1.2mである。石室の主軸方向は、ほぼ真北である。入口付近では、埋葬の

あと石室を塞いだ石（閉塞石）が一部残っていた。盛土は完全に削られていたものの、北側と西側で周溝がよく残り、円墳であることが判明した。周溝は幅1.0～1.9m、深さ0.5m前後のものが、楕円形に墳丘部の周囲をめぐる。墳丘の規模は、裾部で約18m、周溝心部で約20mの直径を復元できる。

石室の中からは多量の遺物が出土した。特に玄室奥壁の西隅と羨道から玄室にかけての部分、さらに羨道の閉塞石近くから集中して出土した。

遺物は土師器・須恵器の土器類がほとんどであったが、死者の身体を飾る金環・銀環などの装身具や鉄製の鏃・馬具などの副葬品、さらに木製の棺に用いていたと考

えられる鉄釘などが見つかった。

出土遺物の型式から、古墳は6世紀の終わり頃に築造されたことがわかった。また、遺物が奥壁や羨道近くにまとめて整理されていること、7世紀初め頃から中期の遺物も多く含まれていることなどから、築造後数度にわたって追葬が行なわれていたことも明らかになった。

この時期の古墳は、数多くが集中して築造される群集墳を形成するのが一般的で、付近には数基から数十基にのぼる小古墳が地下に埋没しているものと考えられた。そこで、当古墳は群集墳を構成する1基と認識し、下西代古墳群の1号墳とした。

大原野の古墳群は、勝持寺古墳群・八幡宮古墳群・円山古墳群の3群が知られている。いずれも下西代1号墳と同様、古墳時代後期の群集墳であるが、今まで発掘調査が行なわれなかったため、個々の古墳の内容はまったくわからなかった。下西代1号墳の発掘調査で大原野地区の一古墳の明確な時期や石室の形態、遺物の内容などが初めて明らかになったのである。

1990年7月から9月の試掘調査で、1号墳の東50mの地点で新たな横穴式石室を発見した。発見した石室は、下西代1号墳と同じ群を形成する古墳として理解し、下西代2号墳と名付けた。

大原野一帯の地下には、まだ多くの古墳が眠っているに違いない。今後の調査で下西代古墳群の全貌もしいに明らかになっていくことだろう。